桜さく島

見知らぬ世界

竹久夢二

青空文庫

路

青い野原のなかを、白い路がながく〳〵つゞいた。

母とも姉とも乳母とも、いまはおぼえもない。

おぶさつたその女が泣くので、私もさそはれてわけはしらずに、ほろ〳〵泣いてゐた。

女の肩に頬をよせると、キモノの花模様が涙のなかに咲いたり蕾んだりした、白い花片が芝居の雪のやうに青い空へちら〳〵と光つては消えしました。

黄楊のさし櫛がおちたのかと思つたら、それは三ケ月だつた。

黒髪のかげの根付の珠は、空へとんでいつては青く光つた。

また赤い簪のふさは、ゆら〳〵とゆれるたんびに草原へおちては狐扇の花に化けた。

少年の不可思議な夢は、白い路をはてしもなく辿つた。

死し

花道のうへにかざしたつくり桜の間から、涙ぐむだカンテラが数しれずかゞやいてゐた。はやしがすむのをきっかけに、あの世からひゞいてくるかとおもはれるやうなわびしい釣鐘の音がきこえる。金の小鳥のやうないたいけな姫君は、百日髪の山賊がふりかざした刃の下に手をあはせて、絶えいる声にこの世の暇乞をするのであつた。

「南無阿弥陀仏」

きらりと光る金属のもとに、黒髪うつくしい襟足がつくりとまへにうちのめつた。血汐のしたゝる生首をひっさげた山賊は、黒い口をゆがめてから〳〵からと打笑つた。

あゝお姫様は斬られたのか。

それは少年のためには「死の最初の発見」であつた。

もう姫君は死んだのだ、死んでしまへば、もうこの世で花も、鳥も、歌も、再びきくこともみることもできないのだ。

涙は少年の胸をこみあげこみあげ頬をながれた。

「死顔」も「黒き笑も」泪にとけて、カンテラの光のなかへぎらぎらときえていつた、舞台も桟敷も金色の波のなかにたゞよふた。

その時、黒装束に覆面した怪物が澤村路之助丈えと染めぬいた幕の裏からあらはれいでゝ赤い毛布をたれて、姫君の死骸をば金泥の襖のうらへと掃いていつてしまつた。

死んだのではない、死んだのではない、あれは芝居といふものだと母は泪をふいてくれた。

さうして少年のやぶれた心はつくのはれたけれど、舞台のうへで姫君のきられたといふことは忘れられない記臆であつた。また赤毛布の裡をば、死んだ姫君が歩いたのも、不可思儀な発見であつた。

傀儡師

……大阪をたちのいても、わたしが姿眼に
たてば、借行輿に日をおくり……
口三味線の浄瑠璃が庭の飛石づたひにちかづいてくるのを、すぐ私
どもはきゝつけました。五十三次の絵双六をなげだして、障子を細
目にあけた姉の袂のしたからそつと外面をみました。
四十ばかりの漢でした、頭には浅黄のヅキンをかぶり、身には墨染
のキモノをつけ、手も足もカウカケにつゝんでゐました、その眼は、
遠い国の藍い海をおもはせるやうにかゞやいてゐました。棒のさき
には、鎧をきたサムライや、赤い振袖をきたオイランがだらりと首
も手をたれてゐました。
漢は自分のかたる浄瑠璃に、さも情がうつつたやうな身振をして人
形をつかつてゐました。
赤い襷をきた人形は、白い手拭のしたに黒い眸をみひらいて、遠
くきた旅をおもひやるやうに顔をふりあげました。
……奈良の旅籠や三輪の茶屋……
五日、三日夜をあかし……
と指おりかぞえ

……二十日あまりに四十両、つかひはたし
て二歩のこる、金ゆへ大事の忠兵衛さ
ん……
といつて、傍らに首をたれた忠兵衛をみやつたガラスの眼には泪が
あるのかとおもはれました。
……科人にしたもわたしから、さぞにくかろう
お腹もたたう……
思ひせまつて梅川は、袖をだいてよろ〳〵よろ、私の方へよろめい
て、はつと踏みとまつて、手をあげた時、白い指がかちりと鳴つた
のです。
私は泣きながら奥へはしりこみました。

阿波鳴門順礼歌

ふる里をはる／〃＼
こゝに紀三井寺
花の都も近くなるらん
「お鶴は死ないんですねえ、母様」
「さいなあ、阿波の鳴門をこえて観音様のお膝許へいきやつたといのう」
「でも、お鶴はお祖母様の手紙を母様にみせたの」
「さいなあ、お鶴の母御は、その手紙をお鶴の懐からとりだして読みながらよみながらお泣やつたといのう」
「母様、お鶴は死んだの」
「なんの、死ぬものぞいの。お鶴は観音様のお膝許へいつたのやがな」
「母様、お鶴はなんて言つて歌つたの」
賽の河原で砂手本
一ツつんでは母のため
二ツつんでは父のため
三千世界の親と子が
死出の旅路をふだらくや
あすの夜たれか添乳せん
「か……母様」
「なあに」
「お……お鶴は死ないんですねえ」

母

二人の少年が泊つた家は、隣村にも名だたる豪家であつた。門のわきには大きな柊の木が、青い空にそゝりたつてゐた。

私どもは杜や障子の骨の黒ずんだ隔座敷へとほされた。床には棕梠をかいた軸が掛つてゐたのをおぼえてゐる。

「健作の母でございます。学校ではもう常住健作がお世話様になりますとてね」

とお母様は言はれて、私の顔をしみ〴〵＼情ぶかい眸でみられた。私は眼をふせて、まへにおかれた初霜の皿の模様へ視線をやつてゐました。

「まあ」

と、思ひもかけぬ声におどろいて、私ははっと顔をあげたのです。お母様は、はしたない行ひをおしつつむやうに

「草之助さんでござんしたか。ま、おほきくおなりやしたことわい、なんぼにおなりやんしたえ」

「十二です」

「まあそんなになりますかいなあ」と夢みる眸をあげて「ようまあ、よつてくださんした」

思ひいつてこういはれた言葉に、曾ておもひもしらぬ感激をおぼえて、私はしみ〴〵＼とよそのおばさんをみました。歯を黒くそめて眉の青い人で、その眼には泪があつた。

縁側で南天の実をみてゐたら、おばさんはうしろから私の肩を袖で抱いて

「おばあさんもおたつしやですかえ」

ときかれた。

千代紙や江戸絵をお土産にもらつて、明る日、村へかへつてきました。

祭の日が暮れて友達のうちへ泊つた一分始終を祖母に話してきかせました。すると、祖母は眼をみはつて、そのかたは父の最初の「つれあひ」だつたと驚かれました。

この日から、少年のちいさい胸には大きな黒い塊がおかれました。妬ましさににて嬉く、悲しさににて懐しい物思をおぼえそめたのです。蔵のまへのサボテンのかげにかくれては私とおなしに眼のわきに黒子のある、なつかしいその人のことを、人しれず思ひやるならはせとなつたのです。ですが私は、その人が私の「生みの母」であるといふことをたしかめるのを恐れました。やつぱりよそのおばさんです。私は、さう思つてゐねばなりませんでした。

窓のムスメ

中窓の欄干にもたれて雨だれをみてゐるムスメがあつた。
肩揚のある羽織には、椿の模様がついてゐた。髪はおたばこぼんにゆつてゐたやうに思はれる。
俯向いてゐたゆえ、顔はどんなであつたかそれはわからない。
けれど、五月雨の頃とて、淡青い空気にへだてられたその横顔はほのかに思ひうかぶ。
戸外にはカリンの木がうはつて、淡紅の花の香が暗い雨の庭にたちまよふてゐた。
それが何時であつたとも、そのムスメが誰であつたとも今は知るよしもない。
母にきけど、そんな窓は見たことがないといふ。
姉にきけど、そのやうなムスメは知らぬといふ。
その頃よんだリイダアなどの絵の女かとおもふけれど、それもたしかでない。
ムスメはつひに俯いたまゝ、いつまでも〳〵私の記臆に青白い影をなげ、灰色の忘却のうへを銀の雨が降りしきる。

炬燵のなか

……お庭のまえの亀岡に
君をはじめてみるときは
千代もへぬべき心地して……

美迦野さんは、炬燵布団の綴糸をまるい白い指ではじきながら、離室の琴歌に声をあはせた。

「あたしね、「黒髪」をあげたらこんどは「春雨」だわ。いゝわね。はるさめ……」

「……」

私はだまつて美迦野さんの靨にうつとりとみとれてゐた。

「草之助さんてば返事がない、いゝ嫁さんでもとつたのかい」

「……」私は笑つてゐた。

「なぜだまつてるのさ。なにかおこつたの」

「うゝん」

「さ、一がさした」

「二がさした」

「三がさした」

「四がさした」

「五がさした」

「六がさした」

「七がさした」

「蜂がさした、ぶん〳〵ぶん……」

「いや、美迦さんはあんまりひどくつねるんだものな」

「いたかつて、ごめんなさい」

そう言つて美迦野さんは、あまへたやうにしんなりとしなだれかゝつて

「まあおかあいそうに」

と言つて、赤くなつた私の手を熱い唇でひつたりと吸ひました。布団を眼深かにかぶつた小鳩のやうに臆病な少年はおど〳〵しながらも、女のするがまゝにまかせてゐた。

少年は女の顔をみあげるのさえはづかしかつた。

青空文庫情報

底本：「桜さく島　見知らぬ世界」洛陽堂
1912（明治45）年4月24日発行
※近代デジタルライブラリー（http://kindai.ndl.go.jp/）で公開されている当該書籍画像に基づいて、作業しました。
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記を新字にあらためました。
※文中の「…」は底本では1文字あたり4点ないしは5点の点線ですが、文字の幅に合わせた「…」で代用しました。
※歴史的仮名遣いから外れたものも、底本通り入力しました。
※促音「っ」の小書きの混在は底本のままとしました。
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：土屋隆
校正：田中敬三
2005年8月22日作成
2010年11月1日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桜さく島

見知らぬ世界

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　竹久夢二
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/